

あるコンピュータ学者の肖像

ー中村義作教授のキャリアとアイデンティティ

小 島 茂 (文と絵)

A Profile of a Computer Scholar: The Career and Identity of Professor
Gisaku Nakamura

Shigeru KOJIMA

ABSTRACT Professor Gisaku Nakamura not only distinguished himself as a computer scientist but also is well recognized as a "puzzle" scholar and collector of Ukiyoe art. He is also said to be quite unique and interesting in his ways of thinking and behavior. This paper examines what makes him stand out, paying special attention to his identity and career.

はじめに

今年の3月でもって、またしてもわが経営情報学部の偉大なキャラクターが消える。この度、定年を迎える中村義作教授である (Fig.1)。中村教授は自他ともに認める、組合せ数学、ソフトウェア工学分野での権威であったが、と同時にその多彩な趣味活動でも知られ、しかも、パズルにせよ特殊浮世絵の収集にせよ、前代未踏の業績を残している。また、その風貌といえ言動といえ哲学といえ、ふつうの学者には見られない奇抜さ、人間的なおもしろ味があり、学部でも話題には事欠かなかった。

私は、そんな中村教授を興味つきない対象として7年間ほど観察させてもらう機会に恵まれた。とくに、学部報「The Challenge」の連載漫画「チャレンジくん」ではモデルとしてもっとも多く登場した教授のひとりになった。そのなかに出てくるパズルの名手、快刀パズルマンも中村教授をモデルとして生まれた人物である (Fig. 2)。中村教授なき後も、学部のために大学のために、場所を情報誌「経情ネット」に移してパズルマンには活躍し続けてもらいたいと思っている。

今回の号は中村教授の定年退官特集ということなので、この小論では「チャレンジくん」および「パズルマン」を通じての中村教授像を紹介しながら、中村教授の人生に対する考え方、価値観、

行動パターンについて述べてみたい。そして、そうしたものが、どのようにして生まれたのかをアイデンティティ (= 自己定義)、キャリア (= 経歴) および人間関係の視点と絡ませ推論を交え考えてみたい¹。

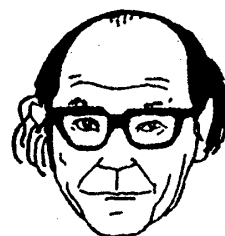


Fig. 1 中村義作教授



Fig. 2 パズルマン

実質・実利主義

日本人は大きくわけて、実質・実利主義の大阪人と形式・理念主義の東京人に分類できる²。諺「花よりダンゴ」は形式よりも実質や実利を重んじる大阪人の価値観を反映し、「武士は食わねど高楊子」は実質よりも形式や理念を重んじる東京人の価値観を反映しているが、中村教授は、東京に生まれながらも、その価値観は大阪人に近いといえる。つまり、花よりダンゴを取るほうなのである。

たとえば、数年ほど前、3ヶ月に渡るヨーロッパ海外出張の機会があった。中村教授ほどのクラスになれば、4つ星か5つ星クラスのホテルに泊まっても不思議ではないものの、実際、泊まったのはひとつ星印クラスのホテルだったという。ヨーロッパではツアーに加わってあちこちを見歩いたり、家族へのおみやげには大金をはたいたりしたものの、ホテルなど一晩寝てしまえばどこも同じという考えで一番安い所にした。

また、大学には毎日バイクで通っていたが、言い分は、「自分一人で通うのに自動車ではガソリン代がもったいない。」で、ヘルメットにマフラーで顔を巻いた姿の中村教授はキャンパスの朝晩の風物のひとつとなった(マンガ②)。

さらに、学部の研究紀要(「経営と情報」)のカバーデザインを変更するかどうかという議論が教授会でもちあがったときも、「カバーのデザインなんてなんだっていい」という意見であった。要するに、皮より中味、つまり、掲載されている論文の内容が大切なのだという。

中村教授自身の皮はというと、服装にも髪型にもまったくといってよいほど無頓着である。毎日同じ服を着ていても気にしていそうもないし、頭髮も伸びたら床屋に行かずに自分でハサミで散髪する。講義も、白墨で汚れた白衣を毎日身に纏って教室にでかけた(マンガ①)。もっとも、逆から見れば、そうしてきたからこそ、あのユニークな独自の風貌、スタイルができあがったともいえなくはない。

中村教授は、何かプロジェクトを起こすさいも、つべこべ空理空論を重ねるよりもまず実行すべきであるという考えである。そしてじっさい、実務

能力と実行力がある。大学院をつくる時も、なぜ必要か、どんな大学院にすべきか、まず理念を徹底的に討論すべきであるという東京型の考え方にたいし、理念も大切であるけれども大学院があったほうがないのよりも学部としての格も上がるし社会の信用も高まるしとにかく得だから早く作ることが先決であるという大阪型の主張だった。かくして、それまでまったく前進しなかった大学院設置準備も、中村教授が学部長になってようやく動き出したのだった。とまれ、実務能力と実行力が買われ、学部長に再任されている(マンガ⑦⑨⑩⑪)。

商人氣質

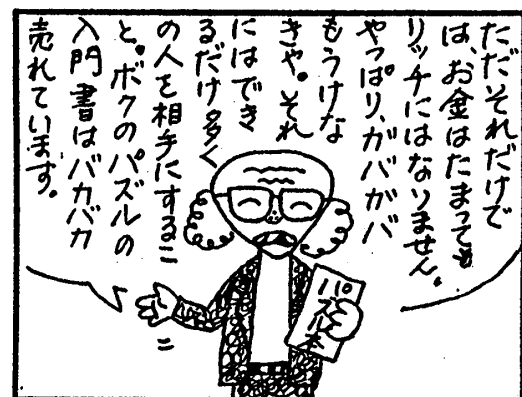
中村教授の実質・実利主義は、教授自身が呉服屋の息子であったという事実と関係しているのかもしれない。つまり、やたら見栄をはったり権威をふりかざしたりする武士とは対極的な、利に敏感で腰の低い商人的な気質である。だから、中村教授は自分が学部長であるからといって偉そうにすることもそれを吹聴することもなかった。電々公社新入社員るとき毎朝、早めに出社してみなの机のうえふいてまわったように、もっとも早く大学に来て秘書がいない秘書室のゴミ箱からゴミを捨てるのを習慣とした。教授会の案内にも、学部長名ではなく、中村義作という個人名で出した。学部のメールボックスも職位の順で並んでいたものを“あいうえお”順に並び替えた。

また、学部長職にたいしても、地位や権限にとまなう威信や虚栄による意味づけをする東京・武士型人間と違って、むしろ役職手当がついたり生涯年金が異なるという実利面を気にしていた。その点でも大阪型・商人の姿と重なるところがあった。

ただ、大阪人は、「東京がなんや!」「政府がなんや!」と権威に対して反抗する反権威主義的なところがあるのに対し、中村教授は反権威主義というよりも非権威主義であったように思う。権威には追従もしないかわりに逆らいもしない。

いつか、偉そうにしている権威には反発したくなる性格だと私がいったら、「それは損ですね」と

①—学者の錬金術—



論されたことがあった。つまり、権威とぶつかって不毛な消耗戦をするよりも、見通しがなければ、ある程度、実利を取った段階で方向転換したほうが得策であるという現実的な考え方である。したがって、当局に対しても、徹底的に抗議するというよりも、ある程度まで抗議してダメだったら「仕方がない」といって引き下がり、収穫のほうに目をやり納得するのであった。

中村教授の商人気質は、そのマーケティング力にも遺憾なく発揮されている。44歳のとき電々公社（現NTT）を辞職して信州大学に移ったとき、まずやったのが地元のマスコミへの挨拶まわりと売り込みであったという。そうした種蒔きをし、人脈をつくってから、地元マスコミにもいろいろと寄稿していったのだった。

算数や数理パズルの本でベストセラーを出したりするのも、読者ニーズをつかみ、なにが受けるかを知って書くからだろう。速算や数学関係の本は入試問題から難問を集め解き方を伝授し、読者として受験生をもつ母親層をしっかりとつかんだのだった。

金銭感覚

中村教授は物事を権威や威信ではなく、お金で計るという独特な金銭感覚もっていたが、こうしたことも商人気質と関係しているのかもしれない。

学部では毎年、高額納税者であり、もらう給与よりも印税をふくめその他で稼ぐ収入のほうが常に高かった。そして確定申告の時期になると毎年、税金の高さにグチをこぼしながらもコピー作業をしている姿が秘書室でみれた。

中村教授の高額収入のメカニズムは、裾野を広くしてできるだけ多くの人から集めるという方法であった。そのためには、おもしろくわかりやすい本を書くのがてっとり早いということで、日々かなりの時間をその執筆に割いていた。（マンガ①③⑤）

もっとも、金銭的にこだわるといっても、ケチくさいところは少しもなかった。むしろ気前はよかったのではないかと。ときどきおごるし、学部長

として、宴会があればいつも裏からそっと祝金を回す機転ももっていた。

講座制的人間関係

中村教授は長い間、講座制の信州大学にいたせいか、人間関係において講座制的な発想が強かった。講座制の人間関係は、教授－助教授－講師－助手というタテの人間関係で、全人格的なコミットが要求される。つまり、教授は弟子に引越しや掃除などプライベートの手伝いまでさせると代わりに、弟子の学位取得から就職の世話、出版まで面倒をみる。そしてその人間関係は卒業後も生涯にわたって続くというものである。

中村教授も前の職場ではそのようにして何人もの弟子に学位をとらせ、就職を斡旋したというが、わが学部ではそういうシステムになっておらず、卒論ゼミの学生もあまり取らなかった。採用条件として、日中のアルバイト禁止、毎日学校に来て卒論作業をあげていたの、学生の方も二の足をふんでしまったのかもしれない。ただ、若手の教官にたいしては、相手に能力があるとみれば援助を惜しかなかった。

講座制は、人材が欠けた場合、基本的にはソトから取るのではなくウチから昇進させるシステムである。学部長時代も、ソトから取るべきであるという一部の声に対し、原則的に内部昇進を優先させた。また、学部の人員構成が年齢的に偏っており、是正しないと将来的にゆゆしき状態が起きることを察して、学部長就任当時、学部長としてははじめて当局に陳情したことがあった。ただ、この陳情は却下され、中村教授はそれ以上アクションを起こすことはなかった。

百科辞典派

フランス革命の一派に百科辞典派という名のグループが存在していたと記憶しているが、中村教授もいうなら百科辞典型人間であった。つまり、ひとつの専門だけで生涯終えるという細い生き方ではなく、なんでもかんでも手を突っ込むタイプであった。ひとつのことを知っているよりも、ど

②—理系教官と文系教官—



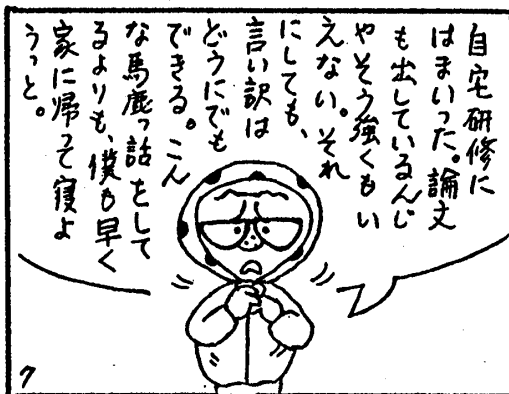
▲コンピュータが専門



▲経営史が専門



▲地方行政が専門



▲経営管理が専門

れだけ数多くの事柄を知っているかに価値をおいていた。だから、英語なら英語を極めるというよりも、中国語もスペイン語もフランス語もふくめいろいろな外国語に手をつけた。日本語も浮世絵収集の縁もあってか、かなりむずかしい江戸文字を読みこなすことができた。

また、その学習方法も百科辞典的で、単語は必要なものを適時調べるのではなくアルファベットから覚えるようにし、新入生にたいしては、大学生活中、好きなものというより広路苑と文学全集を読破するように勧めた。

なんでも知っていることがよいことだから、知らなかったら勉強して知ってしまおうとする。講演の依頼のときも、たまたま自分が知らないテーマであったも、「ハイそれは知ってます。自分の専門分野です」といって、引き受けてしまうのといったことがある。そして、実際の講演の日までににわか勉強をしてひととおりに身につけてしまうらしい。実は、私もこのアドバイスを聞いてしばらく実行してみたことがあった。しかし、精神的ストレスはたまるし、講演でも後ろめたさが残り、結局、うまくいかずやめてしまった。ということで、このアドバイスは中村教授だからできるのであって、そうでない人がやると火傷をするということを身をもって体験したのだった。

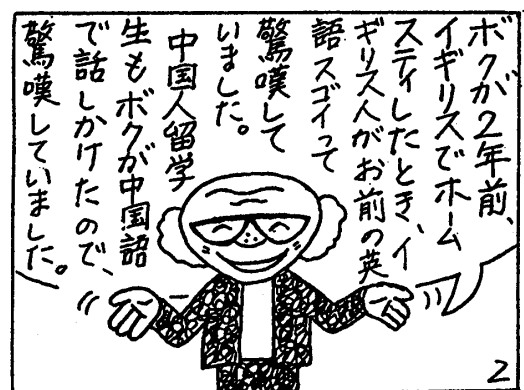
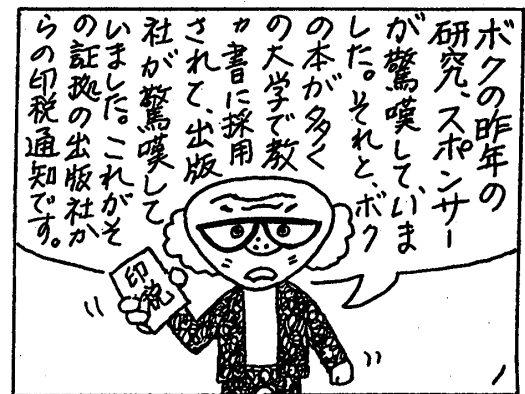
教育方針

中村教授は、数学を使わないで数学を教えるといったようなおもしろい授業をするということによって学生の間で評価は高かった。また、その博識ぶりはいつも学生を驚かせた。とくに持ち前の記憶力を駆使して、学生全員の名前を覚えたので、学生はすっかり感心してしまった。

授業の成績は、努力と意欲で評価した。前列に座り意欲を見せた学生にいい成績をあたえるということになっていたのも、学生は予備校のように関陣取り合戦に血眼になった。もっとも、実際は、席にかかわらず平等に評価していたようである。出席しさえすればまったく分からなくても単位はあたえた(マンガ⑫)。

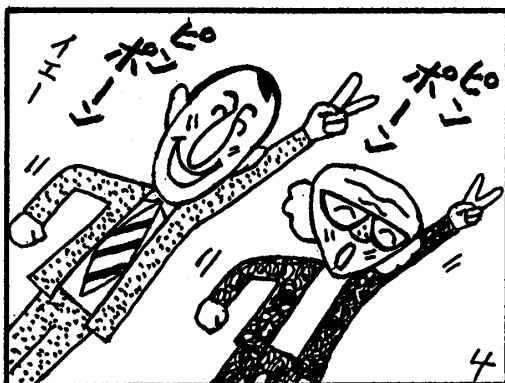
努力と意欲を評価するというのは、中村教授の

⑤—驚嘆した話—



1994.5

④—良妻—



1994.5

③—おもしろい本—



1994.5

人生哲学のバックボーンでもある。かつて、学部報で、次のような文をしたためたことがある。

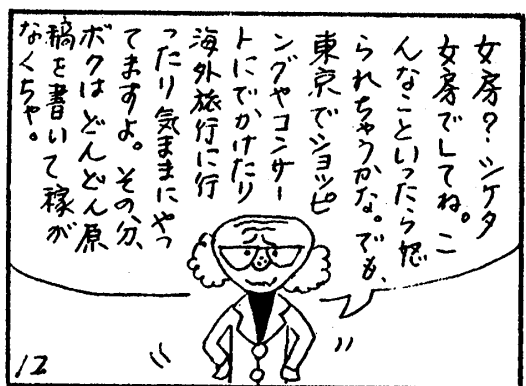
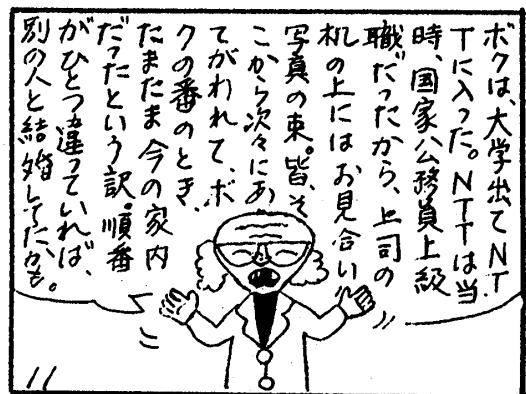
新学年を迎えての賤として、「俗」という字の説明をしておこう。俗という字は、偏が「人」、傍が「谷」である。人が楽な方へ降りたとき、ついには谷まで落ちることを意味する。つまり怠惰で安住な生活をむさぼると、俗人になりさがってしまう。勉学の徒である諸君は、そんなことでは大成しない。むしろ、苦しい方、苦しい方へと努力を重ね、俗人からの脱却をはかるべきである³。

また、卒業する学生に対しては、徳川家康の「人生は重き荷を背負って、坂道を登るがごとし」という文句を引用して、少しでも休むと坂道を転げ落ちてしまうので、社会へ出てからも勉強、努力を怠るなど書いたこともあった⁴。

仕事職人

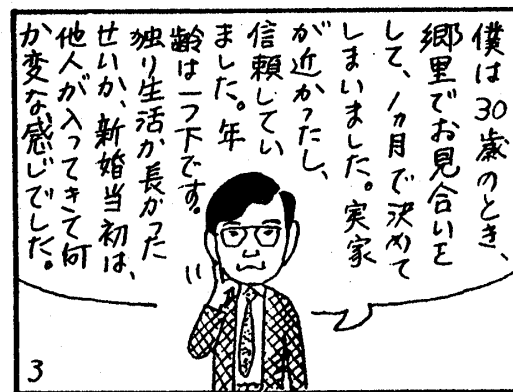
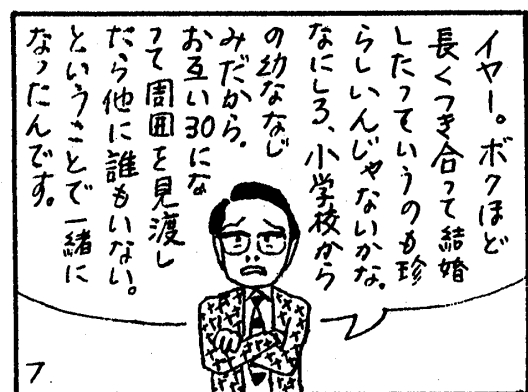
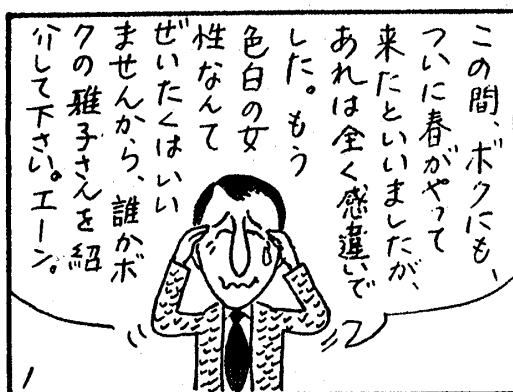
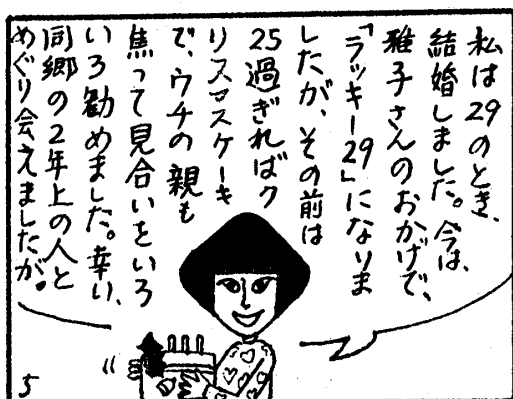
中村教授の仕事の生産性は人並をはずれていた。一部には天才ではないかとの声もあったが、実はそれを支えていたのは並々ならぬ努力だった。では、どうしてこれほどまで努力するのか？

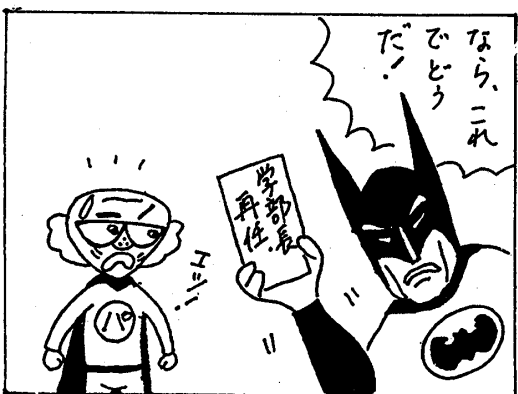
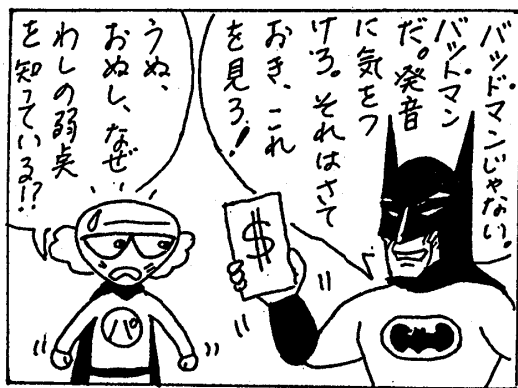
かつて、中村教授は、信州大学工学部では東北大学出身者の閥があってミーティングなどで蚊帳の外に置かれた経験があると語ったことがある。中村教授自身は東北大学から博士号を授与されているにもかかわらず、偏狭な日本の大学はどうもそこを出ていないと認めないらしい。また、母校の日大に対して世間での評価を自嘲してみせたことがあった。日大といえば社長輩出率日本一であり現受験界では日東駒専と中堅の実力大学と評価されているが、国立とくに帝大系がはこびる電々公社にあっては、肩身の狭い思いをしたのかもしれない。そんなおり、もともと知性があり負けず嫌いの教授が人の2倍も3倍も努力したことは想像にかたくない。電子工学で学会賞を2度授賞したのはそのひとつの成果だろう。ちなみに、東大に関しては、中村教授はその後東大の非常勤講師になるが、そこで初代経営情報学部長になる林教



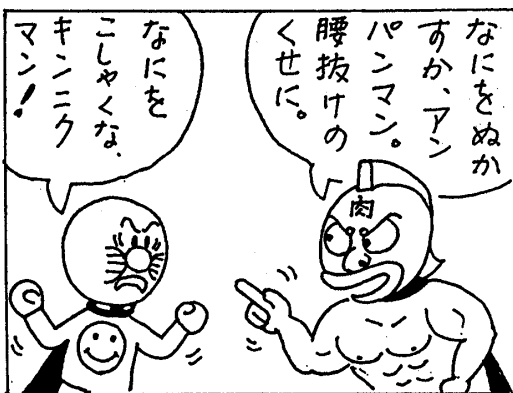
1993.5

⑥—それぞれの結婚—

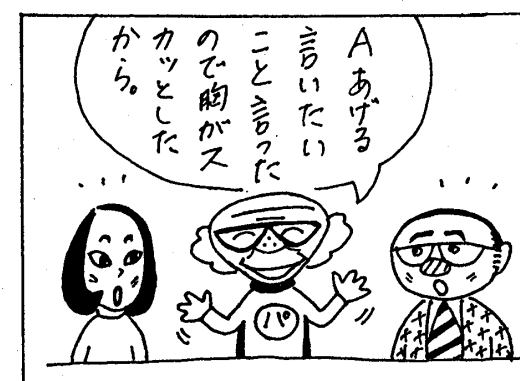
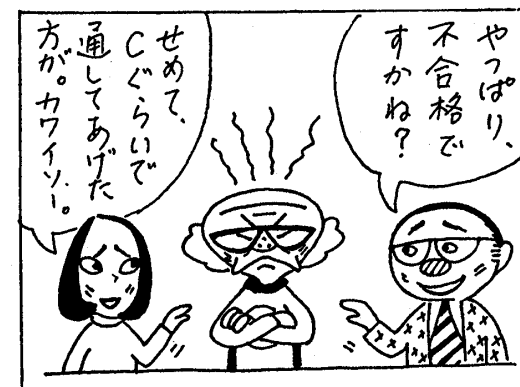
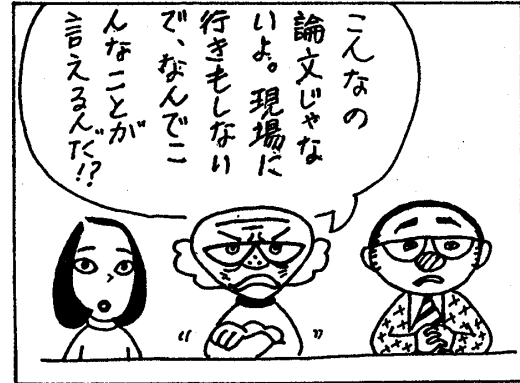




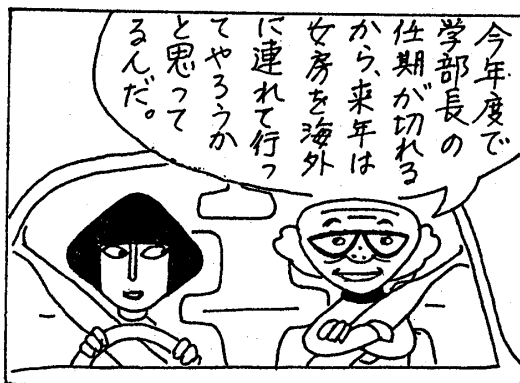
⑦—パズルマン—



⑧—卒論審査—

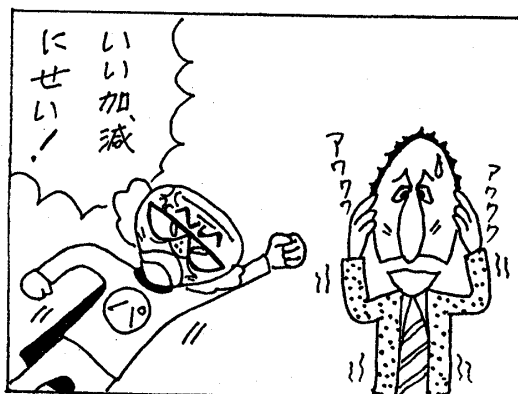


⑩—学部長(2)—



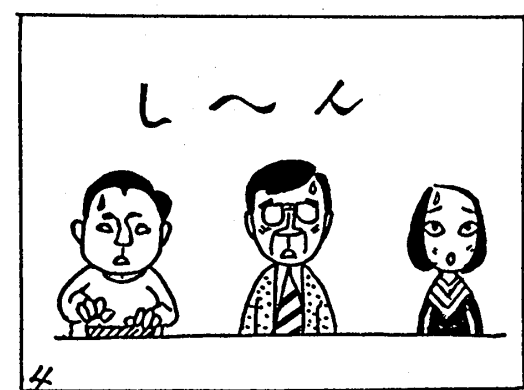
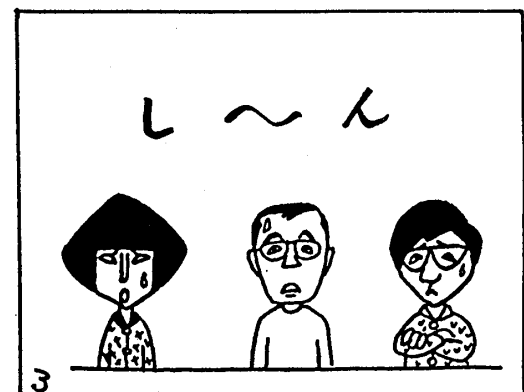
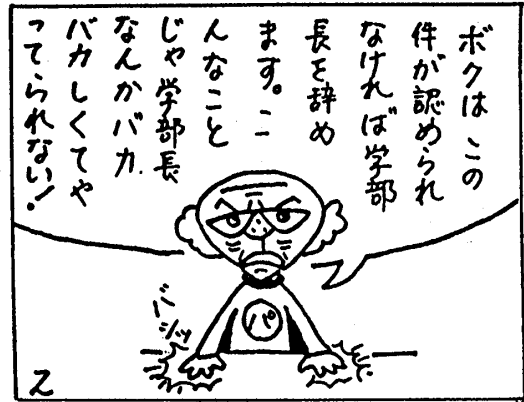
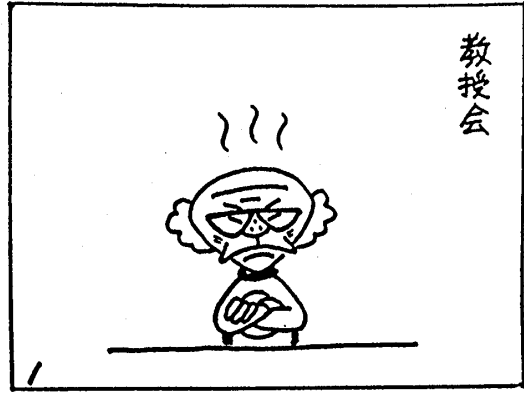
1995.2

⑨—学部長(1)—



1995.2

⑪—伝家の宝刀—

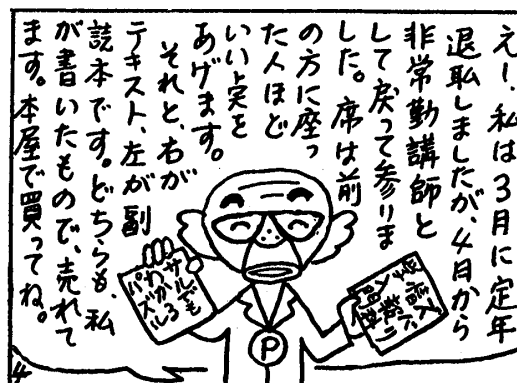
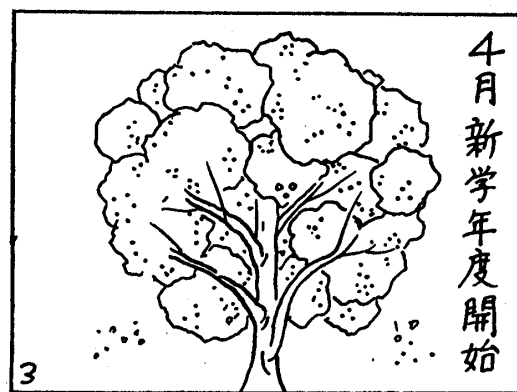
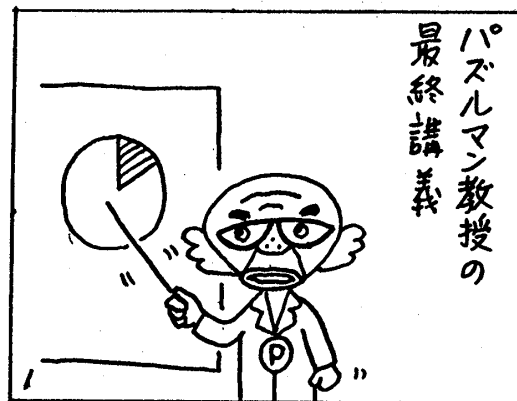


⑬—母と息子—



1996.2

⑫—最終講義—



1996.2

授と知合い、後々にスカウトされて信州大学から静岡県立大学に移ることになったという。

話を「努力」に戻すと、中村教授の仕事ぶりをみて、「職人」と評価する人もいる。思うに、職人とはひとりコツコツ仕事に励み、熟練度の高い作品を生産できるひとのことである。中村教授もひとを雇ってなにかをするということがなかった。コピーでも紙の切り貼りでもなんでも自分でやっていた。そして、作品は職人のよう常に丁寧に締切前にゆとりをもって仕上げ、反響はたいていよかったようだ。それが出版社など取引先からも信用されたのだろう。

中村教授は、「学者で夏休みを遊んでいるようでは失格だ」といって、夏休みもひたすら仕事に励んだ。土曜日も返上して、朝から晩まで仕事をした。そして、今度また本を出すとうれしそうにいまわった(マンガ③)。

もっとも、仕事といっても、中村教授の場合は、趣味を仕事にしてしまったので、ふつうの仕事人間とは異なる。いうなら仕事職人か。パズルももともと、電々公社時代、頭のトレーニングにいいからと趣味として始めたのだが、熱中して、自らパズルの本を執筆するようになったのだった(マンガ⑦⑫)。

中村教授は、仕事職人でありながら、体は丈夫であったようである。数年前、胆石になって緊急入院したことがあったが、翌日にはもう退院して研究室でケロっとして仕事をしていた。風邪を引いても、「風邪は仕事でなおす！」といって仕事を続けた。

家族の謎

サザエさんの磯野家ではないが、中村家の家族関係も謎めいている。中村教授は、電々公社時代、奥さんと見合い結婚し2女をもうけた。信州大学へ移るときは母親といっしょで、嫁姑の関係からか奥さんは東京に残ったらしい。静岡へ移ってから同じパターンで、教授は母親と一緒に住み、奥さんは東京で楽しくやっているという(マンガ④)。

中村教授は、母親思いなのだろう、定刻になる

と寄り道はせずオートバイになって帰宅し、必ず母親のつくった夕食を一緒に取る。私はかつて母親と3人で一緒に寿司を食べたことがあったが、90過ぎても元気で品がありやさしそうな女性であった(マンガ①⑬)。中村教授は幼い頃、足の病気をしたことがあるというが、そんなときもこの母親がやさしくいたわってくれたのだろう。その後も、母親は教授の心の支えになったのではないだろうか。

中村教授はほとんど静岡にいたから、静岡へときおりやってくるのは奥さんのほうだった。母親が病気になったときは、看病にあるため長居したらしい。教授は、ときおり「今度、女房を海外旅行に連れていってやらなきゃ」とか奥さんのことを気にかける発言をした。そんなとき、結果として奥さんより母親のほうを取ってしまったことに後ろめたさを感じているのだろうかとか邪推してみたくもなる。

むすび

家族関係をふくめまだ謎の部分も多いし、まだ推測の域を出ないところも多いが、これまでの観察を手がかりに、中村教授の考え方や価値観や行動様式を見てきた。実質・実利主義、商人気質、百科辞典派、仕事職人などいくつかのキーワードや人間関係でアイデンティティやキャリアを分析したが、そのなかから見えてきたものは、現実離れた天才・奇人のイメージとは裏腹に、日本人の大半がもつ人間くさい現実感覚であり、教授自身のなみなみならぬ努力であった。

注記

1. アイデンティティとは、ここでは、「自分がだれであり、どこへいき、どういう世界に属したいと思っているのか」といった感覚や自分の誇りの源」と定義する。J.A.クローセン「ライフコースの社会学」(1990)および *American Lives* (1993) 参照。
2. 梅棹忠夫 「日本三都論」 参照。

3. The Challenge. 静岡県立大学経営情報学部学部報. 1994. 4. 22.
4. Challenge. 静岡県立大学経営情報学部学部報. 1992. 3. 24.
5. たとえば、作家の新田次郎は専門学校（現電通大）を出て気象庁に入ったが、中央官庁における学歴コンプレックスをバネに小説を書き始め、後に、官庁を辞めて作家に転身したと述べている。
6. Challenge. 静岡県立大学経営情報学部学部報. 1998. 5. 25.

参考文献

梅棹忠夫 「日本三都論」角川書店、1987

J.A.Clausen 「ライフコースの社会学」（佐藤慶幸、小島 茂(訳)）早稲田大学出版部、1990

American Lives University of California Press. 1993

小島 茂 ある経済学者の肖像：山崎 充教授のキャリアとアイデンティティ『経営と情報』（Vol.7. No.1, PP.53-69）1995.

「キャンパスの外国人講師たち：キャリアとアイデンティティの変遷」『経営と情報』（Vol.8. No.1, PP.173-183）1996.

English Translation of the Cartoons

① How to become rich.

1. Today's topic is how to become rich. I have so called "rich ears," but nothing to do with richness. Fortunately, our School has several rich faculty members. Let me ask them

how they made so much money.

2. Money is like a woman. If you love money, you'll be rich. I come to the campus by motor cycle instead of car. I wear the same suits. I cut my hair by myself. But I don't care!
3. If you follow the pattern I mentioned, I guess you make money but can not become rich. To become rich, you must earn much more money. To make much more money, you have to deal with as many as 100,000 people. My books on puzzles sell very well.
5. I don't cling to money, but why I earn more money than the average is that I have been a moonlighter. I worked for my company during the daytime, and wrote essays at night. You have to write clearly for your books to sell well.
6. If you do business with rich people, you may become rich as well.
Since I often have business with company presidents, I sometimes say, "President!" by mistake at meetings.
7. If you have a credentials like a doctor, CPI, or lawyer, then you can earn much more money.
8. Ladies and gentlemen! What do you think about today's discussion?
I was discouraged. I do not have any important license. I'm not a moonlighter. I do not write anything other than academic papers. I have to spend much money because I have two small children. I won't be able to be rich in the near future anyway.

②—Professors of Science vs.
Professors of Social Science—

1. Professors are quite different, depending on their fields of specialization: science or social sciences. Although professors of science come to campus every day, those of social science don't. I wonder if they sleep in bed at home while they are not in the office.
2. Dean, you are wrong. The Kumamoto Prefectural Government and the Matsudo Municipal Government are among my best clients. As professors of science have to come to campus every day to conduct experiments, so I have to go to local governments to do my fieldwork.
3. How great the Kumamoto Prefectural Government and the Matsudo Municipal Government are! I can't argue against his dedication to communities. But I wonder what other professors of social science are doing. I guess they must be sleeping in bed at home when they don't come to campus.
4. Dean, you have never listened to the SBS weekly business program on radio, have you? I serve as a regular commentator there. I'm trying to help advertise our School and University through my activities in the mass media.
5. How wonderful the SBS radio program is! It's good that our School and University have become recognized and well-known. But I wonder what other professors of social science are doing. I guess they must be sleeping in bed at home.
6. I make it a rule to do research at home once

a week, because there are many historical materials there. I think it useless if you sleep in the office even if you are on campus. I also publish papers regularly.

7. How nice the "rule of research at home" sounds! But I can't complain if he publishes papers. Well, it's easy to make excuses. I don't want to waste my time any more. I should go home to sleep.
8. In addition, my-over-90-year-old-mother is waiting for me with her dishes. I should hurry up. Oh, how cold it is outside!

③ Interesting Book

1. My book will come out soon.
2. Congratulations! What kind of book is it?
No good.
3. Professor, Japanese humbly say, "This is no good, but please take it," when they give something. But Americans are more straightforward. If you translate "No good" into English, it means "Very interesting." Am I right?
4. You are right.

④ Good Wife

1. This is my wife. She enjoys herself in Tokyo.
2. My wife is no good. Don't you think so?
Not at all.
3. Professor, if you translate "no good" into English, it means "very good," doesn't it?
4. You are right!

⑤ Impressive Story

1. My sponsor was quite impressed with my research. A publisher was quite surprised because my books sell so well.

2. When I stayed with a British family two years ago, they were quite impressed with my English. Chinese students were surprised because I spoke to them in Chinese.
3. Professor, if you translate "very impressed" into English, it means "not impressed at all," doesn't it?
4. You bastard! Everyone was truly impressed!

⑥ MARRIAGE

1. Last time I told you that spring had almost come to me, but that did not come true. I won't ask for a pretty woman any more, so please find me a bride (crying).
2. Well, it's not good to cry. Today, I'd like to ask my colleagues about their marriage, how they found their spouse and how they feel now.
3. My marriage was arranged when I was 30, and I decided to marry a month later. Our families lived near by and I did not see any problem.
She is a year younger than I. Probably because my single life had lasted so long, at the beginning of my marriage I felt as if I was living with a stranger.
4. Recently, a baby was born and I finally became a "papa." When I saw the baby for the first time, she looked like an alien. Then she looked like a monkey. Now at last she looks like a human being!
5. I got married at age 29, which is now considered a lucky number, thanks to Princess Masako. But before that, after 25, women were considered "unsold" like Xmas cakes. So my parents were in a hurry to arrange a marriage for me. Fortunately, by myself, I found my husband who came from the same town and was two years older than I.
6. My husband's university is far from here, so we live separately. I'm raising three children by myself and he joins us for summer, winter and spring vacations. Our family is like that of a fisherman who spends more than half the year abroad. It's good that "a husband is out but in good health."
7. My wife and I were classmates in elementary school. We got married at age 30, because we found that we were the only single ones among our friends at that time!
8. My wife? She pushes me hard to buy a house. But I can't afford to do that because of educational expenses for my children. My son managed to enter a college this year but there are still two more to go. My daughter, a highschooler, is now difficult to deal with. She does not speak to me at all.
9. I got married at 24. I tend to be in a rush to do things. I eat quickly and got married quickly!
10. After graduating from college, I found a job at a bank, where, to my surprise, I re-met an old friend of mine from my high school years. I decided to get married to her, feeling a sort of "karma" in her presence.
11. After graduating from college, I started working for NTT. At that time, NTT officials were "elite" and young women's photos were piled up on their bosses' desk. The photos were assigned to us young officials one after another and my wife's photo happened to be assigned to me. I might have gotten married to someone else if the photos

had been arranged even slightly differently.

12. My wife? No good. She enjoys shopping and concerts in Tokyo. She also often takes trips overseas. I have to work hard to make much money for her pleasure.

⑦ Puzzleman

1. It's me, Breadman (anpan-man), the strongestman in the world. Ha ha ha ha.
2. Shut up, Breadman! You timid thing!
Shut up, Muscleman!
3. I'll eat you up, like this.
Help, help me!
4. Ha ha ha ha. It's me, Muscleman, the strongestman in the world.
5. Shut up, Muscleman! Muscle does not make a difference.
Shut up, Puzzleman!
6. Can you solve this question?
Too difficult for me. I give up.
7. Ha ha ha ha. IQ is stronger than muscle.
8. Shut up, puzzleman. I know your weakness.
Shut up, badman!
9. I'm not a badman, but batman. Be careful! Anyway, look at this. (\$) How come you know my weakness?
10. He he he he, that's not a problem. I'll make a lot of money by writing books on puzzles after I quit my post as Dean soon.
11. Look at this then. (elected as Dean twice)
12. I don't want to serve as Dean twice. A Dean has to deal with a lot of chores and serve as coordinator.

⑧ Graduation Thesis

1. This doesn't deserve to be called a graduation thesis. How come you can claim such a

thing without going to the spot?

2. What did you do during your four years at university? Go back home!
3. Failed, of course?
Let's give him C, because I feel sorry for him.
4. I'll give him A, because I feel good after shouting.

⑪ Sacred Sword

1. Faculty Meeting
2. I'll quit my post as Dean unless you approve this plan. It's nonsense to serve as Dean any more.
3. Silence
4. Silence
6. Nobody seems to oppose this plan. O.K. It is settled.
7. Let's move on to the next matter on the agenda. Please take a look at the material No.5-2.
8. My sacred sword cuts well in case of an emergency!

⑫ Last Lecture

1. Last lecture by Professor Puzzleman
2. I'm sorry we won't be able to listen to his lectures anymore. He was really interesting and unique.
But I can't stand his grading system. The earlier you come, the better grade you get. He always made a lot of money by selling his books in the class, but he can't do that anymore.
3. Spring came and a new term began.
4. I retired last month but came back as a part-time lecturer this month. In my lectures, the earlier you come to the class, the better grade you get. So please come as early as you can. Also we use my books as text-

books, so please buy them in the bookstore.
O.K.?

⑬ Mother and Son

1. My mother is over 90 and can't hear well any more.
I advise her not to answer the phone, because she can't hear anyway.
2. Am I right? Can you hear me?
Of course, I can hear you. Today's main dish is a baked saury.
3. My son is quite demanding.
I have to shop around, because he doesn't like what I buy for meals.
4. Kidding. I just care about your health. If you stay home all day long, you'll be alzheimer patient.
Today's main dish is a baked saury.